

---

# 伝説騎士\*レジェンド†ナイト\*

澗桜音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伝説騎士\*レジエントナイト\*

### 【Nコード】

N1053Z

### 【作者名】

澁桜音

### 【あらすじ】

気が利く不良、怪力の不良、動物・自然LOVEの怖面不良、フワフワ系の不良、超能力を持つ不良が貴女の悩みをなんでも解決してくれちゃいます。

金持ちと天才が集まるエリート校に通う、上から下まで不良の『秀才不良』と呼ばれる5人が繰り広げる、笑いあり、涙あり、感動あり、なんでもありのストーリー。

タイトル変更しました。

**Legendo 千里の道もキャラ紹介から(前書き)**

金持ちの不良が天才で、しかも人助けをしちゃうという妙なお話です笑

キャラ紹介から始めます。

是非お付き合いください) (

## Legendo

### 千里の道もキャラ紹介から

\*キャラ紹介\*

名前：神川大地かがわだいち

誕生日：6月12日（双子座）

血液型：O型

身長：175cm

体重：62kg

好きな言葉：World is mine

好きな異性：思いやりのある人

ニックネーム：かみちゃん

DATA：仕切るのが上手でいつも中心にいる。性格は明るい。左目の下の傷が怖い雰囲気醸し出しているが、実際は面白いことが大好きな男の子

名前：如月隼きんりのあはまはやし

誕生日：8月27日

血液型：A型

身長：177cm

体重：58kg

好きな言葉：Adel sitzt im Gemut , nicht im Geldut .

好きな異性：ノリのイイ人

ニックネーム：はつぴい

DATA：最強で最凶と恐れられる無敵のヤンキー。プライドが高い乙女座のA型だが、思いやりのある温かい人。喧嘩は当然強いが、勉強も全国模試5位と、かなりの天才。そして、怪力の持ち主。

名前：高嶺薫 たかねかおる

誕生日：7月30日（獅子座）

血液型：B型

身長：184cm

体重：68kg

好きな言葉：唯我独尊

好きな異性：スタイルのイイ人

ニックネーム：かおるん

DATA：有名生花店・TAKANEの社長の息子で、自然と動物をこよなく愛している。一見、タバコをくわえているように見えるが、未成年だし、副流煙のせいで周りの仲間や自然や動物に害を与えたくないため、ココアシガレットをくわえている。

名前：恋丸優樹 こいまるゆうき

誕生日：12月25日（山羊座）

血液型：O型

身長：162cm

体重：49kg

好きな言葉：HAPPY

好きな異性：可愛らしい人

ニックネーム：ゆつきー

DATA：明るく元気なフワフワ系男子で、男女関係なく同じように接することができ、友達も多い。偏差値75の天才。可愛いモノ（特にキティーちゃん）が大好きで、キティーさんと呼ぶ程。

名前：海江田風磨 かいえだふうま

誕生日：5月4日（牡牛座）

血液型：AB型

身長：158cm

体重：43kg

好きな言葉：吾輩は猫である

好きな異性：気が合う人

ニックネーム：ふっち

DATA：占い師で、癒し系キャラとして生きているが、正体不明。  
透視が得意。タロット占い、相性占い、誕生日占い、姓名占い、血液型占いなどできる。

**Legendo 千里の道もキャラ紹介から（後書き）**

だいたいキャラのイメージを掴んでいただけたのなら幸いです。

では次からお話が始まります（\*|\*）

Legend 1 5人寄れば真珠の知恵(前書き)

プロローグという感覚でご覧ください。

意味がわかりにくいと思いますが、温かい目で見てください。



Legend 1 5人寄れば真珠の知恵

「かみちゃん！ちよつと見てよ、今回の依頼！！」

「どうしたんだ、ゆつきー」

「ちよつとヤバいんだって！！ちよつとどころかかなり」

「は？」

パソコンの画面に映し出された文章。依頼内容らしいのだが……。

「私は慶麗学園高等部2年C組の幸村瞳ゆきむらひとみです。実は私、1ヶ月くらい前からヤクザに命を狙われているみたいなんです。迷惑メールが送られて来たり無言電話がかかってきたりして……。このままだと殺されてしまうかもしれません。助けてください……。確かにか。確かに今までで一番ヤバいな」

「でしょ？しかも幸村瞳ゆきむらひとみって、僕のクラスの子なんだよ。だからなんとかしてあげたいんだけどさ……」

「何したんだよ、暗い顔して」

そこに、沈黙を破る荒々しい声をあげたのはかおるなんだった。

「実は今回の依頼がさ……」

ゆつきーが依頼内容を説明すると、荒々しい声がさらに大きくなつた。

「なんだと！！？その幸村瞳ゆきむらひとみって、俺の後輩のカノジヨなんだよ」

「長澤友明ながさわともあきでしょ」

「ああ、オメークラス一緒だっけ。つーかさ、相手がヤクザだったらこつちは日本一と唄われるヤンキー、如月隼を出せばいーんじゃねーの？」

かおるんの視線の先には、ソファアにだらし無く腰をかけてテレビを見ている男の姿があった。

「はっぴい、君の出番っばいんだけど、どうするよ？」

かみちゃんの問いに如月隼ことはっぴいは即答。

「んー、パス」

「ま、いつも通りやればいーんじゃないかな」

自分は関係ないというそぶりを見せるゆつきーにかみちゃんが一言。

「今回はお前に重要な役をやってもらうんだけど」

「えー!!?なんで!!?僕、ひとりでヤクザとドンパチやるのやだよ?」

「そーじゃなくて、幸村瞳と同じクラスなんだったら、情報収集するとか彼女をここに連れて来るとか」

「まー、そんならいなら……」

秀才不良の本部ははっぴいの家の部屋で、ハイテクな機械がたくさんある。

ま、如月財閥の息子のはっぴいにとって、このくらいどうってことない。

今までいくつも依頼を解決してきた5人だが、依頼内容は「迷子になったペットを探してほしい」とか「バイトをしてみたい」とか「恋を成就させたい」というような簡単なものばかりであった。しかし今回は違う。

一歩間違えば大事件へ繋がる可能性もあるのだ。

「これは、やるしかねーよな」

本気になってきたかみちゃんにゆつきーは口を尖らせる。

「えー、こーゆーのは警察に任せようよ」

「サツなんか信用できるわけねーだろ」

かおるんが溶けかけたココアシガレットをくわえながら言った。

「しかもさ、よく考えてみるよ。普通だったら俺らなんか頼まねーでサツに相談すんだろ。それが俺らを選んだってことは、それなりに理由があるんじゃないか?」

「ボクもそう思うよ」

かみちゃんの言葉を継いで小さいけれど存在感のある声を出したのは、ふっつちだった。

「さつきは幸村瞳サンのコトを透視してたんだけど、やっぱり何か大事にしたくない理由があるみたいだよ」

「理由ってなんだよ」

「それを調べて解決に導くのが、ボクらの仕事でしょ」

1年なのに堂々とした性格、大声は出したりしないのに存在感のあるオーラ。

地味そうで地味じゃないふつちに、3年のかおるんも舌を巻く。

「お、おう……」

「ま、とりあえず依頼は引き受けとくぜ」

カチカチ……と文章を打ち、Enterを押して送信。

「じゃ、明日の6時に幸村瞳をここに連れて来いよ、ゆつきー」

「う、うん」

わかりましたよー、という顔で部屋を出ていくゆつきー。

ボタン、という音と共にソファーに腰をかけたかみちゃんにかおるんが声をかけた。

「でもよ、ガチでヤクザとやることになったらどーすんだよ。はっ

ぴいもやる気ねーみてーだしよ」

「戦うことになっても、俺達が負けると思つか？」

スナック菓子の袋に入れかけた手を止めて、かおるんが尋ねる。

「なんでかみちゃんそんなにやる気なんだよ」

「この事件、何か深いワケがありそうだから……」

「深いワケ……？」

頭上にクエスチョンマークを浮かべるも、何かを察したようにそれ以上は声にださなかった。

**Legend 1 5人寄れば真珠の知恵（後書き）**

感想、ご意見お待ちしております。

あとで質問コーナーを設けますので、質問もどうぞ。

**Legend 2**

**親しき仲にも悪戯あり(前書き)**

翠月さんご感想ありがとうございます。

それではどうぞ

ゆつきーは、キティちゃんのハンカチで手を拭きながら本部に戻ってきた。

「あー、スッキリした〜。トイレ借りたよ。はっぴいん家のトイレ、凄く落ち着くねー」

が、案の定それに対するはっぴいの返事はなかった。

「もう9時か……」

ふと時計を見上げると、金の装飾が施された長針が12、銀の短針が9をさすところだった。

「今日はこの辺にしとくか。じゃ、はっぴい以外の4人でやるからゆつきー、忘れんなよ」

「大丈夫だつて」

「俺は喧嘩に備えて、少し鍛えとくか」

「楽しいコトになりそうな予感がするよ」

と、かみちゃん、ゆつきー、かおるん、ふつちが立ち上がったところで、腰の重かったはっぴいも立ち上がった。

「つつよし」

「えー!? はっぴいも来てくれんの?」

「ん、トイレ」

口が開きっぱなしの4人を尻目に、はっぴいは部屋を出ていった。

「なーんか嫌な予感が……」

ふつちがそう呟いた直後、はっぴいの悲鳴に近い叫びが響いた。

「まさか……」

4人がトイレへ駆け付けけると、その視界に呆然と立ち尽くすはっぴいの姿があった。

「はっぴい?」

声をかけるかみちゃんは、トイレから微かにもれて見えたピンクの光を見逃さなかった。

「やつぱり……」

振り向いた視線の先には、にんまりと笑うゆつきーの姿が。

「えへへー、どお、はっぴい？喜んでくれた？」

なんと、トイレ一面がキティちゃんで埋め尽くされていたのだ。

キティちゃんのピンクの服がかみちゃんの目に見えたのだ。

「お、俺のトイレが……」

取り乱すはっぴい。

実ははっぴいは、ゆつきーにイタズラをされた時だけ、パニックに陥る。

ゆつきーのイタズラにはさすがに他の3人は慣れたのだが、何故かはっぴいだけは慣れず、いつもパニックってしまう。

壁に頭を打ち付け始めるが、いつものことなので、もう誰も相手にしない。

かおるんはキティちゃんだらけのトイレに入った。

「うおつ、キティさんだらけ！！だが、こんなにキティさんが見てたら恥ずかしくてズボンさげらんねーよな？」

冗談混じりにはっぴいを慰めるが、大理石の壁にキティちゃんを貼られた衝撃は大きかったらしい。

紫のオーラを放ったまま、ピンクのトイレへと消えていった。

「じゃ、僕はこの辺で」

そろりと忍び足で立ち去ろうとしたゆつきーは背後から視線を感じて足を止めた。

「ゆつきー、いい加減にしねーか。じゃねーと……」

にこやかに話していたかみちゃんの顔が一瞬にして変化した。

「どーなるかわかってんだろーなア」

恐怖の低音ボイスを耳にしても、慣れっこのゆつきーは平常心を保っている。

「はーい、じゃあねん」

キティちゃんのぬいぐるみを床の上にポンと置くと、猫のように軽やかに はっぴいの家を後にした。

「まったく、特にはつぴいにはイタズラすんなっていつてんのに」

「でも、それが彼の性格だから否定はできないよ。しかもいつもキティさんだから可愛くていいじゃない。ま、かおるんはうーこばかりだけどね」

「それ口に出さなくてもいいだろ！！！！！！！」

少し顔を赤くしながら、ふつちを軽く殴るかおるん。

「ま、アレだな。かおるんは下キャラだから」

かみちゃんが涼しげに言う。

「ってかまだ俺、この話で下ネタ言っただけでなくね！？何も言っただけでうちから読者の皆さんに下キャラだっと思われたくねーし、イメーシダウンじゃねーか！！！！！！」

吠えるかおるんに

「でもさ、下キャラっていう前提で突っ走ったほうが、楽じゃない？」

となだめるふつち。

「そーゆー問題じゃねーんだよ！！！！！！」

と、その時。

「うああああ！！！！」

まだパニックから解放されていないはつぴいの悲鳴が響いた。

「ど、どーした！？」

ゆつきーがいないのに、はつぴいがパニックなんて初めてのことであった。

「トイレトペーパーが、無え……………」

そんなことでもパニックのね……………。それはさておき。

「ここにちゃんとあるよ」

ふつちが足元を指差す。

「ナイス、ふつち！！行くぜ、はつぴい！！！！」

かみちゃんがトイレの中に投げ込んだ途端、再びはつぴいの悲鳴が。廊下は暗くてわからなかったのだが、明るいトイレの中ではハッキリと見えた。



薄ピンク色で、キティちゃんがプリントしてあるトイレレットペーパーのロールが。

**Legend 2 親しき仲にも悪戯あり（後書き）**

ご意見、ご感想お待ちしております。

5人の中で誰が好きとか教えていただけるとありがたいです

### Legend 3

#### 不良に金棒（前書き）

身の回りに気になってるイケメンがいたとします。

そのイケメンにはカノジョがいますが、お世辞でも可愛いとは言えません。

そんな時、そのイケメンにカノジョがいることよりも、可愛いとは言えない女にカレシがいることのほうが悔しい、と思うのではないかと考えるのは私だけでしょうか。

では始まります

### Legend 3 不良に金棒

本部のドアが開いて、男性2名、女性1名が入ってきた。

それは、ゆつきーと依頼人の幸村瞳、そして彼女の恋人の長澤友明だった。

「……………かみちゃん、つ、連れてきたよ……………」

「は!?!?」

目を丸くするかみちゃん。

それは無理もない。

呼んだはずのない男、長澤の姿があったからである。

「ゆつきー、ちよつ、こつちこい」

部屋の隅にゆつきーを連れていくと、軽く頭を殴るかみちゃん。

「なーんでカレシまで連れてくんだよ」

「そ、それがさあ……………」

「瞳、ちよつと話があるんだけど……………」

「え、あつ、依頼のこと?」

「うん、詳しく話を聞きたいから、今日の6時に本部まで来てくれないかな?」

「うん、大丈夫、わかった」

ここまででは良かったんだけど……………」

「オイ、恋丸、人の女に何手エ出してんだよ」

「何でもないの、ともくん」

「あ?何でもねーわけねーだろ。それとも、俺に言えねーことでもあんのか?」

「そーゆーわけじゃ……………」

「んなら、俺もついてく」

「え、ちよつと困るんだけど……………」

「あ？」

「何でもないです!!」

「なんて東縛野郎なんだ!!ま、しょーがねえ」

かみちゃんとゆつきーはソファーに座り、向かいのソファーに2人を座らせた。

「ど、どうも。幸村瞳です」

軽くお辞儀をする瞳に、かみちゃんとゆつきーも続く。

「改めて紹介します。動物大好きゆつきーです。初めてだから緊張しちゃうなー」

「合コンか!!なんだよその口調!!クラスメートなんだろ!?!しかもお前この仕事初めてじゃねーだろ」

一気にツッコむかみちゃんに「えへっ、ノリだよノリ」とウインクするゆつきー。

「俺は神川大地だ。それで、依頼についてだけ……」

「はい、メールに書いた通りなのですが、ヤクザの人に命を狙われているみたいなんです。無言電話や迷惑メールはいつものことで、誰かに後をつけられている気もするんです」

この言葉の途中で、長澤の眉毛が一瞬ピクリと動いたのをかみちゃんは見逃さなかった。

「どうして、ヤクザだっかわかったの？」

「非通知だったから、電話がかかっている間にウチで逆探知したら、ヤクザの人の家の電話だったの」

「ってことは、ケータイじゃないのか。何か心当たりは？」

「えー……」

そう言っただけはチラリと長澤の様子をうかがい見た。しかし、長澤はそれには気づかず、テーブルに置かれた、ブランドの生花店TAKANE（もちろんかおるんが持ち込んだ）の真紅のバラを見つめていた。

「無いんだな？」

カレシの前だと言いくいのだろうと考えたかみちゃんは、無理に言わせることはしなかった。

「え、ええ……」

コクリと頷く瞳に、ゆっきーが質問をする。

「ねえ、でもどうしてヤクザの家だってわかったのに警察に言わなかったの？」

「後からその家を調べたら、もうその住人は引っ越していたの。

その人、近所付き合いもなく、どんな人なのか、なんて名前なのか、いつどこに行ったのかもわからなかったの。しかも　しかも　警察なんて信じられないのよ！！！！」

大声を出した後、瞳はあつ、と我に帰り、小さくごめんなさいと言った。

「どうしてサツが信じられねーんだ？」

瞳はかみちゃんの問いに、一瞬の間をあけて口を開いた。

「あれは小学校低学年の頃でした。えーっと、私の父が事故に遭ったんです。ビルの屋上にいて、謝って転落して死にました。…えーっと……あれは、屋上のフェンスが老朽化していて、いつ事故が起きてもおかしくなかったんです。えっと、あ、だから、そのビルの会社のほうが責任を取らなくちゃいけなかったのに、警察は父の自殺だと断定して処理したんです。遺書もなくて、翌週の休日に遊ぶ約束をしていたのに自殺なんかするはずなかったんです。……えっと、もう一度調べ直してほしいと頼んだのですが、何回調べても結果は同じだって言われて……。そんないい加減な警察なんか信じられません。しかも今回は自分の身なんです。自分を守ってくれるのはもう、みなさん5人しかいないって思ったんです」

涙混じりに瞳は口を閉じた。

その途端、長澤が瞳の白い頬を殴った。

「……」

その場にいた全員が驚きの表情を浮かべる。

「なにするの!？」

床に倒れ込んだ瞳は、ソファーの上の長澤を睨みつけた。

「お前、俺のこと嫌いなのか」

長澤は立ち上がり、瞳を見下ろした。

「なんで!？嫌いだっいたら付き合ったりなんかしないわ!?!?!」

「だったらさっきの『みなさん5人しか信じられない』ってどういうことだよ!？」

「そ、それとこれとは関係ないでしょ!？」

瞳も立ち上がり、「今日はもう帰ります。すみません」と言って長澤を置いて部屋を出ようとした、その時

「オイ、長澤」

心を震わせるワイルドな低音ボイスが響き渡り、瞳は足を止めた。

「この声は……高嶺部長!?!？」

**Legend 3 不良に金棒（後書き）**

ご意見、ご感想是非お願いします。  
ダメだしも大歓迎です Mじゃないよ^^



Legend 4

作者の顔も三度まで（前書き）

冬だ。

寒い。

雪やだ。

課外でクリスマスはない。

部活だ。

滑る。

寒い。

ではどうぞ

部屋の隅からココアシガレットをくわえて姿を現したのは、動物愛護同好会自然保護部（名前ながつ！！）の長澤の先輩である高嶺薫ことかおるんだった。（ちなみに部長）

「オイ、てめえ。それでも動物愛護同好会自然保護部か。モットーを忘れたとは言わせねー。一、人間も動物のひとつ。大切にすること。特に女には暴力を振るうべからずって。それを破ったら切腹って決まりだろ」

「いや、大袈裟だろ！！確かに大事なことだけど、切腹って……」  
鋭くツツコむかみちゃんに、「俺が決めた」と微笑みかけ、長澤を睨みつけるかおるん。

「す、すみません、部長！！決まりですが、命だけは、命だけは助けて下さい！！！！！！」

「だーかーらー、大袈裟だつて！！」

かみちゃんは呆れ顔で言うが、かおるんの目は本気だ。

「ま、しゃーねーから命だけは助けてやる。だが、早く出ていけ！！！！」

かおるんの叫びに「は、はい！！おやすみなさい！！！！」と急いで部屋を出ていく長澤。

「つたく、女の子殴るなんてあるえねー」

かおるんは頭をかきながら瞳に近寄った。

「大丈夫だったか？アイツ、自分のことしか考えらんねー単細胞だからな。……おっと……」

ここにかおるんは黙り込んでしまった、というか声が出せなくなっ  
てしまったのだ。

なぜなら瞳は、かおるんの好みのタイプである『スタイルのイイ子』  
だったからである。

「ちよつと、かおるん鼻血、鼻血！！」

ゆつきーが慌ててティッシュを持ってかける。

「べ、別に変なこと考えたわけじゃ、ね、ねーからな……っ」  
目を泳がせるかおるんを尻目にふっちが一言。

「これだから下キャラは」

「フツ」

普段笑うことが少ないはっぴいまでも笑わせてしまつかおるんのキヤラ。

でも一応、怖面なんだよ

かおるんはふて腐れながらも、瞳がさつき長澤に殴られた左頬を押さえていることに気づいた。

「あ、ちよつと待つてる」

そう言つてかおるんは奥からタオルで包んだ保冷剤を持ってきた。

「痛むなら冷やしたほうがいいだろ。返さなくてもいいから」

「ありがとうございます。気を遣わせてしまつてすみません」

瞳は保冷剤を左頬に当てると、部屋のドアを開けた。

「今日はこれで失礼します。7時半から用事があるので……」

気がつくともう7時を回っていた。

「あ、ごめんな。じゃ、また話聞くとと思うから、そんな時はよろしくな」

「はい、よろしくお願いします。では、おやすみなさい。あ、それと……」

瞳はクルリとターンしてかおるんのほうを向いた。

「私、エッチな人、嫌いではないですよ」

ボタン

本部に沈黙が流れた。

というより、あーあ、っていう空気。

「やっぱ誰が見てもかおるんは下キャラなんだー」

「ま、かおるんと言えば、『変態』だもんな。どーする、かおるん。

瞳、かおるんのこと嫌いじゃねーって」

かみちゃんはへらへら笑いながらかおるんの肩を叩いた。

「ちよつ、待てよ!!!俺の代名詞って『下キャラ』『変態』『エッチな人』の3つなわけ!!!?なんだよ、俺、何もやってねーのに(ま、鼻血出したけど;)サイテーな奴じゃねーか!!!女子から嫌われる要素満載じゃねーかよ!!!!!!!」

「だーいじよーぶ、その3つの代名詞はサイテーに聞こえるが、必ずしもサイテーなわけじゃねえ。聞いた話だと女子は健全な男子よりは、男の本能が見え隠れしてる男のほうが好きらしい。ま、腐りすぎはよくねーが、ちよつとはスケベなほうがいいんだよ」

「あんま慰めになつてねーよ!!!!!!!つーかその情報、どっから聞いたんだよ!!!?」

「え、作者」

「作者アアア!!!!!!てめえ!!!!!!」

「いい情報ありがとな!!!!!!」

「!!!!!!」

どういたしまして

誤解しないでいただきたいが、これは私個人の意見ではなく、10代女子の意見である。

健全すぎても気持ち悪いよねー、ということらしい。

「つーか作者つて女だったんだ。こんな変な話書いてるからつくり男かと思つてた」

失礼ねっ!!!

アンタがどんな行動するかは私にかかってんだよ!!!

例えば、教室のシーンでパンツ脱がせることだってできるんだからね!!!!!!

「すみませんでしたー!!!!!!」

「ねえ、かおるん。さつきから騒ぎすぎ。しかも何作者と話してるの?作者はかおるんのことあんま好きじゃないみたいだよ。ねえ、

作者サン、5人の中で1番好きなキャラって、やっぱボクだよね」

「うっせーよ!!!!!!何話してるの?とか言つててめえも話しかけてんじゃねーか!!!!!!」

作者との会話をかおるんに遮られたふつちは、ぷーと口を尖らせた。

みんな大好きだから安心してね

中でもはっぴいはお気に入りで……

「あのさ、作者さん。そろそろかおるん黙らせてもらえる？」

まだ下キャラ、変態、エッチな人について騒いでいるかおるん。

しょうがないね、わかった。

みんな！！私の力を目に焼き付けてね (妖笑)

Legend 4

作者の顔も三度まで（後書き）

夏が恋しい……

かおるんいじられすぎだね、ま、いつか。

明日は嵐の相葉雅紀ちゃんと、テニスの王子様の越前リョーマと声  
優の柿原サンと銀魂のきららのバースデーだすよ  
おめでと

Legend 5 出るイケメンは打たれる(前書き)

今年も終わるうゝ(\*ー\*)

今日はちびまる子ちゃんの丸尾くんの誕生日だって知ってましたか？  
笑

## Legend 5 出るイケメンは打たれる

キーンコーンカーンコーン……

ここは慶麗学園高等部3年F組の教室。

チャイムと共に教室中の騒音が止み、1時間目、現代文の教師の音無あゆみ（おとなしあゆみ）が入ってきた。

「起立」

週番の号令でクラスメートは一斉に立ち上がる。

と、その時。

3年F組26番、慶麗学園高等部の秀才不良であり、動物愛護同好会自然保護部部長の高嶺薫、通称かおるんが声を上げた。

「ちよつと待て」

ざわつく教室の一番後ろの窓側の席からかおるんが手を挙げながら前に出てきた。

そして教卓の上で膝立ちをした。

「どうしたの、高嶺くん！！あなたの成績が良いことは分かっているけど、授業を壊すのなら出ていってもらわよ！！？」

しかし、音無の叫びを無視し、かおるんはみんなに声をかけた。

「今から俺から目を離すんじゃねーぞ」

頭の上にクエスチョンマークを浮かべながらも、言われたとおりにするクラスメート。

と、次の瞬間。

「キヤーーーー！！！！！！」

張り裂けるような女子の悲鳴が学校中にこだました。

それは、かおるんがみんなの前でパンツをさげたからであった。

その日で、高嶺薫の好感度がどん底まで陥ったのは言うまでもない。

こんな感じでどう！！？



「な、なんかすみません……」

恐ろしい作者の力に、さすがの秀才不良も青ざめて言う。

と、いうことで、これからは変なことしたらすぐに痛い目に遭わせ  
てあげるから、覚悟し・て・ね

「えー、じゃあこれからは真面目に生きよー。あんな目に遭いたく  
ないし、好感度下げたくないしー」

あ、待つてー！真面目に生きるのはダメー！不良じゃなくなったら  
お話しけないからー！！！！

「ご、ごめんなさいー！！」

ゆつきーはすっかり怯えてしまったが、一人だけ平気な顔でソファ  
ーにもたれている男がいた。

そう、日本一の不良、はっぴいだった。

「おい、お前作者のお気に入りだからって油断してんじゃねーよ。  
いつ何されるかわかんねーからな」

「油断？別に俺はこんな作者なんて……って、なんだコレ！！！！？」  
お気に入りでも容赦しないゾ

はっぴいの身に何が起きたのかと言うと、フリフリのメイド服を着  
せられてしまったのだ。

しかもキティーちゃんの耳つき。

ってか、私しゃべりすぎちゃったからもう話しかけないでね。

「話は最初に返るが、別に瞳が好きになったわけじゃねーからな。  
飯にも後輩のカノジヨだし。ただ、今日、殴ったことは気に入わね

ーが……」

かおるんの話を受けて、ゆつきーも言う。

「でも、長澤って前はあんな感じじゃなかったんだよ。みんなにも  
もちろん瞳にも優しくかったし。殴るなんて考えられないよ」

「しかもさ、彼女、俺らに嘘をついてたよな」

「えー！？」

かみちやんの言葉に驚くかおるんとゆつきー。

「ボクもそう思う」

「俺も」

ふつちとはつぴいも気づいたらしい。

「まず、あの親父さんの話。親父さんが亡くなったのは本当だと思  
うが、転落死ではないと思う。話してる途中、えーと、とか変な間  
が多かっただろ？ 思い出しながら話したから上手く言葉が繋がらな  
かっただけかもしんねーが、嘘の可能性が高い。しかも彼女、たま  
に長澤の様子を伺うように見てた。絶対、カレの前では言いにくい  
ことがあったに違いねえ。それと瞳が話してる途中で、長澤の表情  
が一瞬引き攣る時があった。それも気になるし、ゆつきーのさつき  
の言葉も」

「え！？ 僕の言葉？」

「ああ。長澤は前は優しい奴だつて言っただろ？ それがいきなり束  
縛したり暴力を振るったり。明らかにおかしい。凶暴化したのつて  
いつからだつたかわかるか？」

「うーん…… 3月くらいからかな……。1年の時は普通に優しく  
良い奴だつたんだ。だけど、2年になる頃になって急に性格が変わ  
つたんだよ。確か瞳と付き合い始めたのもその時期だつたような……」

……  
かみちゃんは右手に顎を寄せ、目を閉じた。

「やっぱり睨んだ通り、この事件には深いワケがありそうだな……」  
「ねえ」

と、突然ふつちが声をあげた。

「瞳サン、ヤクザに命を狙われてるつて言つてたよね。1人で返し  
て良かったのかな？ 何か嫌な感じがするんだけど……」

「あ、そーいえば……！！」

かみちゃんは立ち上がって4人に命令を出した。

「かおるん、はつぴいは依頼人の搜索。無事の場合はしつかり家ま  
で送り届けること。緊急事態の場合はすぐ俺に連絡しろ。状況に応  
じて俺が指令を出す。ゆつきー、ふつちは長澤の行方を追え。長澤  
がここを出てからかなり時間が経っているが、ふつちの能力を使っ

て探せ。見つけたら声をかけずにすぐ本部に連絡だ」

「わかった」

「しゃーねーなァ」

「了解しましたあ!」

「できるかぎりがんばってみるよ」

かみちゃんという言葉に、かおるん、はっぴい、ゆっきー、ふっちもそれぞれ腰をあげる。

そして急いで部屋を出ていこうとした。

その時、思い出したようにかみちゃんが声をあげた。

「ちよ、はっぴい。そのまま外出る気か？ 勇気あんなあ」

4人の視線の先には、メイド服&ネコ耳姿のはっぴいがいた。

**Legend 5 出るイケメンは打たれる(後書き)**

それでは良いお年をお過ごしください)\*^ ^\*(

ご意見、感想お待ちしております)\*、、\*(

**Legend 6 急がば急げ(前書き)**

明けましておめでとうございませう(∨∧・°・)

今年もよろしくお願いいたします^^

ではございませう

「まだそう遠くには行ってねーはずだよな」

「ああ、ま、お前がふざけてたせいで時間は結構経ったけどな」

無敵の3年生コンビは、幸村瞳の行方を追っていた。

ゆっきーからもらった瞳の家の地図を持った二人は、商店街へと向かう道を歩いていた。

「7時半から用事があるって言ってたよな。用事って何だろ」

「もしかしたらそいつも嘘かもしんねえ。とりあえず家に行ってみるか」

すると二人は、道の上にバッグが落ちていることに気づいた。

「何だコレ？」

かおるんはそれを拾い上げ、中身を見た。

「幸村のだったり」

はっぴいは冗談混じりにそう言い、腕を組んだ。

「ビンゴ」

かおるんは、その中に入っていた慶麗学園の生徒手帳の裏面を見ながら答えた。

「マチかよ」

はっぴいは辺りを見回したが、そこは住宅街で、人を襲ったりするには難しい場所であった。

「こんなところじゃ人なんか襲えねーな。とにかく家に行ってみようぜ」

2人は住宅街と商店街を通り抜け、瞳の家に辿りついた。

「どちら様でしょうか」

チャイムを押すと、穏やかな口調の女声が、門のスピーカーから流れた。

「えー、幸村瞳さんの友人の高嶺薫と如月隼と申します。あの、瞳さんはお帰りになられていますか」

さすが有名高級生花店TAKANE社長の息子というだけあって、一応礼儀については叩き込まれているようだ。

「まだお帰りになられていないようです」

「7時半に用事があると言っていたのですが、その用事とは何か教えてくださいますか？」

「用事ですか？今日は何もありませんですが……。少々お待ちください」

かおるんは空を見上げ、腕組みをしながら塀にもたれ掛かっているはつぴいに話しかけた。

「なあ、不自然だよな」

「ああ」

もう空にはたくさん星たちが輝きはじめ、オレンジ色に光る満月が東の空を不気味に照らしていた。

「あんな住宅街じゃ人を襲うにも襲えねえ。が、バッグは道に落ちた。バッグなんて、落としたら普通気づくよな。それと7時半からの用事。たぶん用事なんてなかったんだろう。そうなれば、なぜ嘘をついたか、だ。先に長澤は帰ったんだからよ、本当のこと話せただろ。家にもいない、家族も知らないとなると、今、彼女はどこにいて誰と何をやってるのか」

「ああ。……そーいや、月が変な時は不吉なことが起きるとか、ふつちの奴が言つてやがったな。もしかしたら、こら、この拳を使う時がくつかもしんねえなア……」

意味深なはつぴいの言葉に、かおるんは思わず唾を呑んだ。

「お待たせしました。やはり、本日お嬢様は用事などないとのことでした。そのことについて旦那様が詳しくお話を聞きたいと申しておられますので、よろしければおあがりください」

女性の言葉を聞いて、かおるんは薄く笑った。

「わかりました」

「今、門を開けますね」

ガチャ、と音を立てて、立派な門が自動で開いた。

2人は顔を見合わせた。

「何か情報が掴めるかもしれないねえ。はっぴい、お前ちゃんと礼儀正しくしろよ」

「当たり前ーだろ。これでも如月財閥の息子なんだからよ。あ、かみちゃんに連絡しとくぜ」

ピッピッ……

「あ、かおるん・はっぴいチームからだ」

本部で待機していたかみちゃんに、1本の連絡が入った。

「俺だ。幸村は7時半からの用事はなく、家にも帰ってねえ。しかも住宅街に幸村のバッグが落ちていた。詳しいことは後で話す。今、幸村の家の前にいるんだが、幸村の親父が詳しく話を聞きたいらしく、家に入れと言われた。話が終わったらまた連絡する」

「おう。頼んだ」

ピッ

「もう瞳は事件に巻き込まれちゃったのか……？なら注意を怠った俺の責任でもある……」

かみちゃんはゆっくりと椅子に座ったその瞬間、再び本部にコールが鳴り響いた。

今度はゆつきー・ふつちチームからだった。

かみちゃんがボタンを押すと、静かなゆつきーの声が聞こえてきた。「何！？ヤクザのアジトが見つかった！？ああ、すぐ本部に戻ってきてくれ」

ピッ

「そーいや、瞳の親父って……」

ゆつきー・ふつちの低学年チームは、長澤本人は見つけられなかったものの、今回の依頼に1番関係のあるヤクザの本拠地を発見した



のだった。

それまでの経緯は次の通りである。

「かみちゃんはあんなこと言ってたけどさ、ボク、人探しのために能力使ったことってないんだよね」

こう呟くのは他でもない、ふつちである。

「まーまー、ふつちならそんなくらいできるよ!!」

「そー言われてもねー……」

「ほら、早く瞑想とかやってよ!! やってみればなんとかなるかもよ!!」

「う、うん……」

そう言っただけでふつちは静かに目を閉じ、瞑想に入った。

1分が経過し、ふつちはいきなり目を開いた。

「なんか見えた?」

「うん、一応……」

と言って走り始める。

「こつちにいんの?」

「うん、こつちの方から気を感じたんだ。長澤サンのモノかどうかはわからないけど、すごく強かった」

「まあ、とりあえず行ってみよう」

どのくらい走っただろう。

気づくともう8時を回っていた。

「特に何もなかったよ」

ゆっきーが息を切らしながら言うと、「しっ」とふつちが口の前で人差し指を立てて見せた。

「見てよ、アレ」

塀の陰から覗いてみると、1つの大きな建物があり、数人が出入りしていた。

「まさかアレ……」

そう、その建物は紛れも無い、瞳を狙っていると思われるヤクザの

本拠地だったのだ。

「とりあえず、かみちゃんに連絡しよう」

Legend 6 急がば急げ(後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております!!

Legend 7

壁に耳あり空間に人間あり(前書き)

冷えますね

雪よ、積もらないでおくれ。

ではどうぞ

「で、その建物どんな感じだった？」

本部に戻ってきたゆつきーとふつち。

かみちゃんの質問に興奮気味に答える。

「んーとねー、普通の家だった」

ちなみに、ゆつきーの言う普通とは、一般に言う豪邸のことである。

「じゃあ何でヤクザのアジトだってわかったんだ？」

「だって、その家に入りに入りしてた人たち、リーゼントだったり派手な柄の服着てたりしてたんだもん。この辺でヤクザって言えば1組しかないでしょ？」

ゆつきーに続いてふつちが笑いながら言う。

「今時リーゼントとか派手服とか時代遅れってカンジだよな」

「ま、それは個人のセンスの問題だな。この辺の唯一の暴力団と言えば、竜海組だよな。……竜海組っていや、中学の頃、はっぴいをスカウトしてたグループだった」

「え！？はっぴいヤクザにスカウトされたの！？」

「ああ。あいつ、幼稚園ガキ児ン時から強くてよ。たぶんあん時は中学生相手でも勝てたな。でもそのわりに頭もすんげー良くて。あいつも俺も、名門の小学校に入ったんだ。あいつ常にテストで満点取ってたけど、小3ン時、高3に勝負挑まれてよ、なんか俺まで連れてかれて。ま、結局勝ったんだけど」

自慢げに話すかみちゃんに、ゆつきーは素直に感心する。

「へー、かみちゃんもはっぴいも昔っから強かったんだー。ってことは、2人は幼少中高ずっと同じなの？」

「まあな、あいつとずっと一緒だったせいでいろんな事件に巻き込まれちまったけどな」

「いろんな事件？」

かみちゃんは脚を組み直して話し始めた。

「あれは小5ン時だったかな。はっぴいの奴、ガキのくせに大人泣かすつので有名でさ。しかも学力テストは県内1位、全国で5位ときてる。頭はイイ、喧嘩は強えつーので、当然のことながら、目え付けられてたんだ。んで、とうとうこの辺で最強の竜海組とやり合うことになっちまってよ。あの野郎、また俺も連れてきやがったんだ。だが、俺がいたところでこっちが不利なのに変わりはない。た。なんだって50対2だからな。はあ、あん時はマヂで結構大変だったなー。ま、余裕で全員伸ばしちまったが。でも、あまりに大事になりすぎてサツが来ちまったんだ。俺らガキは無傷で大人は伸びてるつー妙な光景だったんだが、一人が目を覚ましやがってよ、俺らがやっただって言いやがったんだ。が、こんなガキに出来るわけねーって軽くあしらわれてセーフだったんだが、危なく少年院行きになるとこだったぜ」

かみちゃんの話に目をキラキラさせるゆっきー。

「すごいー！！かみちゃんもはっぴいもさすがー！！だから竜海組ははっぴいが欲しかったんだね。でもなんで断ったの？」

「俺は売られた喧嘩は買うが、無意味に誰かを傷つける拳に生憎興味はねえ、護る拳だけを貫きてーんだ、つつつてな」

「カツコイイ！！！！やつぱはっぴいすごいなー」  
すると、ふっちが口を開いた。

「もしかして、依頼内容聞いて、瞳サンを狙ってるヤクザが竜海組だつてわかったから、はっぴい最初のうちは乗り気じゃなかったの？」

「たぶんな。俺もそう思って、無理にやらせようとはしなかったんだ。でも、ちゃんと協力してくれてるってことは、あいつなりに自分の中ではじめがついたのかもしれないな。『護るための拳』だつて」

そう言っただかみちゃんはコップを手に取ってアイスコーヒーを一気に飲み干した。

「実は、瞳のバッグが住宅街に落ちてたらしい」

ゆつきーが目を丸くして口をはさんだ。

「え！？でも住宅街なんて人を襲う場所じゃないよね。だけど、バッグを落としたら気づくはずだし……」

「ああ、そこが不明なんだ。だが、クロロホルムなんかを使って悲鳴を上げる前に人目を盗んで連れ去った可能性もある。だから、もしかしたらそのアジトの中に瞳がいるかもしんねえ」

「じゃあ、アジトの中を調べてくればいいんだね。なら良いものがあるよ」

ふつちは本部の中の自分のスペースに行き、奇妙な道具の山の中から大きな袋を取り出してきた。

「何だそれ？」

「まあ、見てて」

ふつちは袋の中から薄紫色のコートのようなものを取り出し、静かにそれを身にまとった。

すると……

「えっ！！！！？」

驚きを隠せないかみちゃんとゆつきー。

無理もない。

コートを着た途端、ふつちが煙のように消えてしまったからだ。

「どう？使えるでしょ？」

ふつちの声だけが何の変わりもなく聞こえる。

「これさ、ボクのドラえもん好きのおじさんがつくった透明人間になれるコートなんだ。ボクのおじさん、海外で活躍してる発明家なんだけどさ」

「もしかして、海江田かいえだたみお民男？」

かみちゃんの問いに「ピンポン」とにっこり微笑むふつち。

「えー、すっごーい！！僕、海江田博士に憧れて発明家になろうと思ったことがあるんだー。まさかふつちのおじさんだったなんて」

「なんだか嬉しいな。それでさ、このコートを着れば、簡単にアジトに潜り込めると思っよ」

ふっちはコートを脱いで、人間の形を取り戻しながら言った。

「この前どっさりアメリカから贈られてきてさ。使えるものはたくさん使おう。説明書付きでわかりやすいし」

夢のような道具が溢れるふっちのスペースで、ゆっきーとかみちちゃんまでもが興奮していた。



Legend 7

壁に耳あり空間に人間あり（後書き）

今回、はっぴいとかおるん出てこなかったガ（。。。ん

大丈夫、次回いっぱい出てくるから（――――）

ご意見、ご感想お待ちしております（\* < > \*）

Legend 8 不良も歩けば情報に当たる(前書き)

あと五日で冬休み終わる泣

普段より1週間強早いのに課題多いなんて拷問だぁ……(T T)

でわどーぞ( ^ - ^ ) /

「どういうことだ？娘が事件に巻き込まれているだと？」

「え、ええ……。まだ断定はできませんが、瞳さんのバッグが落ちていましたし、私たち便利屋をやってまして、相談を受けていたんです。『ヤクザに命を狙われているから助けてほしい』と。何か心当たりはありませんか？」

丁寧な口調で話すのは、お馴染み高嶺薫ことかおるんである。

かおるんとはつぴいの容姿を見た瞬間、眉をひそめて警戒する様子を見せた幸村家の人々だったが、穏やかで礼儀正しい中身を見て、心を許したのであった。

「心当たりねえ……。私は芸能事務所ユキムラの社長だから、恨みを買うということはあつたかもしれない。本当に娘には申し訳ないと思っっているのだが……。しかし、ヤクザとは……。もしかするとその中に私どもを恨む奴がいるのかもしれない」

ゆきむら幸村眩太46歳。芸能事務所ユキムラの社長で、幸村瞳の父。事務所に所属しているモデル、タレント、アイドル、女優、俳優は必ずブレイクすると一目置かれている芸能事務所で、裏で手を回しているのでは、という噂が流れたこともある。

正式な取り引きをしていたと立証されたのだが、まだ疑っている者も少なくない。

「そうですか……。やはり今日は用事というのはなかったんですね」

「ああ。私はよく知らんが、娘の世話係がそう言っておる。まだ家に帰つたらんし、私どもも行方を知らんのだよ。実を言うと、娘の携帯に発信機能がついているんだが、途絶えてしまつてな。どうしたものと悩んでいるときにお前さんたちが来てな」

「うーん……。手がかりが少な過ぎますね……」

かおるんは下を向いて考え込んだが、さっぱり何も繋がらない。

チラリとはつぴいに視線を送るが、ただ首を横に振るだけである。

「あ、そういえば」

突然、眩太が声をあげた。

「何か思い出されましたか？」

かおるんとはつぴいは身を乗り出して尋ねる。

「ああ、この前、ウチに1本の電話が入ったんだ。また苦情だろう  
と思い執事が出たのだが、相手は感じが少し変だったそうさ。妙に  
荒々しい声で、よくわからん言葉を叫んで電話を切ったそうさ。逆  
探知したところ、それはヤクザの人が住んでいた家だったのだ」

「そのことは瞳さんがおっしゃっていました。調べたときにはもう  
その人は引越してしまっていたと」

今度ははつぴいが答えた。

「そうなのか、黒鉄くろがね」

眩太の問いに、執事の黒鉄は1歩前に進んで話しはじめた。

「ええ、確かにございました。捜査いたしましたのは、そのお電話  
の翌日でございましたが、お嬢様は、そのかなり前から悩まれてお  
られたようです」

言い終えて1歩下がった黒鉄に続いて、メイドの一人、中村なかむらえみ絵美が  
口を開いた。

「あの、お嬢様は恋人の方から暴力を受けておられました……」

「恋人と言つと……長澤からか。すみません、それはいつ頃からで  
すか？」

「えーと、お付き合いを始められてすぐでしたので、3月頃ですね」  
「やつぱり、ゆつきーが言つてた長澤の性格が変わつた時期と一致  
してるな……。具体的な被害は？」

「アザやコブが出来たり、血を流して帰って来られたりした時もご  
ざいました。ですが、旦那様や奥様には言わないように申し付けら  
れておりましたので、お2人には黙っております。このようなこ  
とになるのですしたら、お話ししておけば良かったと後悔しておりま  
す。申し訳ございませんでした……」

涙ぐみながら話す中村に、眩太は「仕方のないことだ。あまり気に

するな」と声をかける。

「どういうことですか?」

すると突然ドアが開いて、豪華なドレスをまとった女性が客間に入ってきた。

「奥様!」

幸村愛39歳。瞳の母親で眩太の妻。

社長夫人でありながら自らも芸能活動をしており、人気女優「幸村波那」として大ブレイク中なのである。

「幸村波那じゃねーか!!! すっげー!!! 瞳のお袋って幸村波那だったのか!!!!」

はしゃぐかおるんを尻目に、はっぴいは呆れ顔で言う。

「てめえ、みつともねーことしてんじゃねーよ。それより、早く帰って情報整理したほうがいーんじゃねえか」

「あ、ああ、そーだな。もう情報はねえみてーだし」

「すみません、我々は失礼します。一刻も早く瞳さんを見つけだす必要がありますので」

立ち上がる2人に、眩太は「娘を頼む」と言った。

「はい」

2人がクルリと振り向くと、ドアのそばに愛がいた。

「私はミステリードラマに出演しているけれど、現実のことはさっぱりわからないわ。……瞳を捜すのに全力を尽くしてちょうだいね」  
不安そうな表情の愛に軽く礼をして、2人は幸村邸を後にした。

Legend 8

不良も歩けば情報に当たる(後書き)

今回はかみちゃんどゆっきーとふっちが出てこなかった；

大丈夫、次は全員出てきます!!!

……我ながら、はっぴいけめそだと思う。

カレシにするならはっぴい(――――)

感想、意見、じゃんじゃんくらいは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1053z/>

---

伝説騎士\*レジェンド†ナイト\*

2012年1月5日01時54分発行